「敬愛大学国際学部国際協力学科」案内

敬愛大学国際学部長
小田　英郎

この「学部学科案内」は、敬愛大学広報担当の求めに応じて、高校向け進学説明パンフレット作成のために、1997年（平成９年）５月に書かれたものである。この度、『敬愛大学国際研究』編集委員会の要請により、ここに収録することになった。数字、付表その他、若干の補正、加筆を行ったほかは、ほとんど原型のままである。

国際学部国際協力学科の概要

［創　　設］ 1997年（平成９年）４月

［入学定員］ 200名（帰国生徒・留学生、計20名を含む）

［収容定員］ 850名（２年編入・３年編入各10名を含む）

［目　　的］ 国際協力に必要な人材――幅広い教養とグローバルな視野、及び高度の専門性を合わせ持った21世紀の国際人――の養成。単なる「書斎型の国際人」ではなく「実践する国際人」の育成を目指す。

［意　　義］

国際協力に必要な人材の育成は21世紀日本の急務

21世紀の国際社会で担うべき日本の役割は主として国際貢献であり、その国際貢献は主として国際協力の形で行われるべきものだということは、あらためて言うまでもありません。

このことは日本国内でもしだいに認識されるようになっており、政府レベルの国際協力は近年盛んに行われるようになっています。それは、例えば政府開発援助（ODA）の額が、1991年以降世界第１位を続けていること

にも、よく示されています。にもかかわらず、残念ながら日本の国際協力は、ODAの額に見合った評価を受けていません。それにはさまざまな理由がありますが、その一つは、国際協力は大規模化していくのに、国際協力に関する日本独自の哲学や理念が確立しておらず、その実施体制にも行き届かない点があるからです（日本政府は、1992年に「ODA大綱」を公表するなどして、ODA実施の原則を明確化してはいますが、それで十分というわけではありません）。

それに加えて、国際協力に必要な幅の広い視野や知識や技術をもつ人材の育成の面で、日本が遅れをとっている点も、国際協力に関する日本の大きな弱点の一つとなっています。

このことは、日本では国際協力に携わる民間組織（非政府組織＝NGO）の総数が、その国力の割りには少ないことにも表れています。

国際協力に必要な人材の育成は、21世紀日本の急務なのです。

国際協力を専門とする学科を大学に創設することの必要性は大きい

ごく最近まで日本では、国際協力に必要な人材の育成を専門的、組織的に行う教育機関は、ほとんどありませんでした。

最近になって、大学院レベルでは例えば神戸大学大学院のように国際協力研究科（修士課程、博士後期課程）を開設するところも出てきましたが、この種の大学院は日本では10指に足りません。大学院の定員は僅かですから、これでは国際協力に必要な人材を育成する体制は、とうてい十分とは言えません。

それに、大学院の目的は「学術の理論及び応用を教授研究し、その深奥をきわめて、文化の発展に寄与することを目的とする」（学校教育法・第65条、下線は筆者）であるので、そこまでいかなくとも、その前段階である大学（大学は「学術の中心として、広く知識を授けるとともに、深く専門の学芸を教授研究し、知的、道徳的及び応用的能力を展開させることを目的とする」学校教育法・第52条）で、広く国際協力に必要な人材を育成することが可能で

あるし、そうした人材の育成に乗り出すべきだという考えを、私たちはずっともち続けてきました。広い意味の国際協力に直接関わる人材の育成は、大学院よりも、まず大学学部レベルで広く行われるべきだと、私たちは考えています。

国際協力学科のパイオニア、敬愛大学――建学の精神「敬天愛人」の具現化

敬愛大学国際学部国際協力学科創設には、上に述べたような背景があるのです。私たちが国際協力学科創設の準備にとりかかった当時、日本には大学レベルでそうした学科は存在しませんでした。しかし、実際には敬愛大学より１年早い1996年（平成８年）４月、北関東（水戸市）の常磐大学に国際学部国際協力学科（入学定員100名）が創設されました。そうした次第で、敬愛大学の国際協力学科は全国では２番目の創設ですが、首都圏では初ということになります（その後1998年４月に八千代市にある秀明大学に国際協力学部が新設されました）。

いずれにせよ、敬愛大学国際学部が、国際協力に必要な人材の育成という点で、パイオニア的存在であることは、大いに誇るべきことです。

それに、国際協力というのは、敬愛大学の建学の精神である「敬天愛人」の、「国際社会における現代的具現化」であるとも言えます。敬天愛人の「敬天」とは「自己を絶対化しない謙虚な姿勢」に通じますし、「愛人」は「ヒューマニズムそのもの」と言ってもよいでしょう。敬愛大学が国際協力学科を創設したのは、その建学の精神からして、自然の流れであったと言っても過言ではありません。

［国際協力学科で何を学ぶか］

広領域学

国際協力学科で学ぶ学問は、「広領域学」としての国際協力学です。

従来の学問は、文化科学に限ってみても、法律学、政治学、行政学、経済学、社会学、歴史学、文化人類学、言語学、哲学などのような「個別科

学（ディシプリン）」に分かれていましたが、「人間生活に関わりを持つさまざまな現象」のなかに、こうした細分化された個別科学による観察・分析では十分理解できない部分が多くある、という認識がしだいに広がってきました。

そうしたことから、諸科学への細分化への反省が生まれ、これら個別科学を含みながら、それを総合化しようと目指す「広領域学」への指向性が強まってきました。interdisciplinary approach to（politics, economies etc.）とか multidisciplinary approach to（culture）とかいう言い方が、さかんに聞かれるようになったのは、そのことをはっきりと示しています。「国際関係学（国際関係論、国際学）」、「地域研究」などという学問分野は、そうした広領域学の先駆的なものと言えます。

広領域学としての「国際協力学」

国際協力学もそうした広領域学の一つです。

それは、簡単に言えば、国際協力に関わるさまざまな「問題の発見」、「問題の原因」と「問題の現在の状況」の把握、そして「問題解決」のための「方法」の発見、それを「実践する手順」などを、interdisciplinary な方法で見出していくことを目指す学問ということになります。

幅広いカリキュラム

(1)　敬愛大学国際学部国際協力学科のカリキュラムは、恐らく一つの学科としては、もっとも幅広い構成をもっていると言えるでしょう。それは、広領域学としての国際協力学が、前に述べたように、社会科学、人文科学から自然科学の一部をも含み、かつそれらの諸科学を総合化しようと目指すものであり、また個々の具体的な問題の全体像を把握し、さらに進んでそれらの問題の今後の展開を予測しながら、時には必要に応じてその問題の解決方法を見出そうと目指すものだからです。

(2)　まず１年次で社会科学、人文科学から自然科学の一部をも含めた幅

広い「総合基礎科目」を学習することによって知識の裾野を広げ、併せて、国際的なコミュニケーション手段としてもっとも重要な英語を、しっかりと身につけることに集中します。英語の学習はむろん1年次で終わるわけではなく、4年次まで学習できる仕組みになっています。なお、英語担当教員の半数以上はいわゆる native speaker（英語を母国語とする人々）です。

現代に生きる人々にとって不可欠のコミュニケーション手段であるコンピュータについても、その習熟を目指して、1年次から講座を設けてあります。

(3)　2年次からは、国際協力の主たる展開の場となる世界各地域についての理解を深めるために、地域研究を一つの柱とした「専門基礎科目」を学習し、併せてフランス語、スペイン語、ロシア語、中国語、アラビア語、朝鮮語などの第2外国語（1科目選択必修）を学ぶことによって、国際的コミュニケーションの手段の幅を広げます。これら第2外国語の担当教員も、その大部分が native speaker です。

(4)　3年次、4年次には、「専門系列科目」を学習することによって、国際社会の基礎構造を理解・把握し、国際協力の具体的展開に必要な法的・政策的枠組みなどについての知識を身につけ、また「国際協力の主体としての日本」を取り囲む国際環境についての理解を深めます。

(5)　さらに3、4年次おけるゼミ学習を通じて豊富な問題意識を養い、4年次には自分の選んだ研究テーマについての卒業論文を作成します（⇨個々のテーマについて、構成能力、論理の展開能力、分析能力、論証能力等の養成）。

各ゼミともその構成員は1学年平均8名弱ですから、文字どおりの少人数教育です。

海外スクーリング、海外語学研修

(1)　日本国内での単なる「書斎型学習」に陥らないよう、さまざまな海

表１　海外スクーリング

行き先	時期	参加人数	訪問先
フィリピン	1998年８月	４名	(1)JICA高生産性稲作技術研究計画 (2)JICAフィリピン・エイズ対策プロジェクト (3)フィリピン大学
アメリカ合衆国	1998年９月	15名	ニューメキシコ州サンタフェ (1)タオス見学 (2)Latin America Youth Center
ベトナム	1999年12月	25名	(1)ホーチミン市内ストリート・チルドレン支援NGO (2)カントー大学 (3)メコンデルタ農村生活探訪 (4)JICA事業視察
フィリピン	2000年３月	17名	(1)JICA高生産性稲作技術研究計画 (2)JICA家族計画母子保健プロジェクト (3)JICAフィリピン・エイズ対策プロジェクト

（注）海外スクーリングは本来２年次生以上が対象であるが，1998年３月にも，フィリピンで試験的に海外スクーリング（１年生対象）を実施している．

表２　海外ボランティア活動

行き先	時期	参加人数	訪問先
中国 （内蒙古自治区）	1999年８月	23名	(1)内蒙古大学 (2)植林作業（クブチ砂漠の恩格貝）

（注）このほか，オーストラリア国立ウーロンゴン大学（University of Wollongong）と提携関係にあり（2000年３月までに４名を留学生として派遣），また海外語学研修をニュージーランドの International Language Academies（1998年２月～３月），前記の University of Wollongong（1999年２月～３月，2000年２月～３月）などで実施している．

外経験の機会をもうけています（⇨単位認定）。

(2)　とくに海外スクーリングは、国際協力学科が独自に組むプランのほか、国内外の信用のおける団体が組むプランについての情報を、学生諸君に伝え、それへの参加の道を開いています。

なお、これまでの主な実績については、表１を参照。

ボランティア活動

(1)　国際協力に不可欠なボランティア精神の涵養のため、（国内外での）ボランティア 活動を奨励します（⇨単位認定）。

(2)　ボランティア活動についての、事前の講義を充実させ、活動そのものの意義等について考え、判断できるように、十分なオリエンテーションを行います。

なお、これまでの主な実績については、表2を参照。

教授陣

35名の専任教員は、いずれも豊かな研究・教育実績・海外経験・国際協力経験をもつスタッフであり、特に教授陣は慶應義塾大学、筑波大学、横浜市立大学などの名誉教授、世界銀行、国際協力事業団（JICA）、環境庁、三菱総合研究所、アジア経済研究所、参議院外務委員会、ロシア東欧経済研究所、日本国際ボランティア・センター、朝日新聞社などで長年活動してきたスペシャリストを含み、きわめて充実しております。また若手の専任教員のなかにも、在外公館（日本大使館）で専門調査員として現地調査に従事した経験をもつ人たち、その他、海外経験豊富な人材が多く含まれています。

これらの専任教員のほかに、敬愛大学経済学部や他の大学、研究機関などに所属するスペシャリストが、非常勤講師として外国語の授業や一般講義を担当しており、その数は44名に達します（1999年度）。入学定員200名、収容定員850人という学生数を考えれば、私学としては、充実した教育体制を整えていると言えるのではないでしょうか。

卒業後の進路（就職）

国際協力学科の卒業生の進路は、極めて多方面にわたると考えられます。

国連諸機関、世界銀行などの国際機関や、国際協力銀行、JICAなどの国内専門機関、国内外のNGOはもちろんですが、それだけではありません。各省庁や地方自治体、および海外に展開するさまざまな企業もまた、国際協力学を専門的に学んだ人材を必要としているのです。つまり現代にあっては、利潤追求の組織である企業でさえも、その活動を、国際協力の

枠組みのなかで展開せざるをえないというのが実情なのです。

今後、国際協力関連業務の比率は、官公庁、企業などを含むあらゆる組織で、ますます高まるものと考えられます。

その意味で、国際協力学科に学ぶ学生の卒業後の進路については、明るい見通しをもっています。

資格等

大学進学に際して、入学した学部でどのような資格をとれるかが、大学・学部の選択に大きく作用するという見方があります。確かにそういう見方には、それなりの根拠がありそうです。文科系学部について言えば、法学部の司法試験、経済学部や経営学部系統の公認会計士試験などの受験者は少なくありません。また、学部のカリキュラムの範囲で取得可能なものとして一番ポピュラーなのは、教員資格でしょう。

しかし、少子化傾向がますます進行しつつある現在（そして将来も）、教育学部の卒業生ですら教職につくことは容易でなく、まして非教育学部系の卒業生が、教員免許を生かして使える可能性はきわめて乏しいと言わなければなりません。それでも敬愛大学では、それらの教員資格取得希望者が入学して来ることを考えて、国際協力学科の学生が教員免許を取得できる道を開くことを、目下検討中です。

しかし、国際協力学科としては、資格も悪くはないが、それよりも実力をつけることのほうに、むしろ力点をおいてカリキュラムを組んでいます。例えば英検１級・準１級を取得するとか、国際開発コンサルタントとしての実力を養うとかいったことのほうが、大きな意味をもつのではないかと考えるからです。

大学での学習と並んで、学外の専門学校その他各種学校でのダブル・スクーリングを行うことも、本人の立てる人生計画の中身によっては、有意義かもしれません。卒業必要単位は130単位で、数字的にはさほど厳しいものではないので、学外での学習は、十分に可能なはずです。